わたしが猫になろうと思った理由のいくつか

沢本新 Arata Sawamoto

アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

目次

第一章　紫色の〈魔女〉　5
第二章　猫は泣けない　31
第三章　寄り合い　57
第四章　夜の草原と、野球場　87
第五章　美しい庭　113
第六章　脱出　135
第七章　〈魔女〉の住処　179
第八章　ケイの話　207
第九章　夜想曲　253
第十章　別れの曲　267

第一章　紫色の〈魔女〉

呼吸の方法を、忘れてしまったみたいだった。

全日本ジュニアクラシックコンクール予選会場となっている神沢文化小劇場のエントランスホールから出るまで、祈里の呼吸はずっと止まったままだった。

冬の風が容赦なく頬を叩いた。先週降った大雪の名残がまだ路面のあちらこちらに見える。吸い込んだ空気は、肺の奥まで凍りつかせるほど冷たかった。

「祈里！」

お母さんが慌てて駆けてきた。なぜ今のうちに逃げてしまわなかったのだろう。呼吸の方法さえ忘れていなければ、追いつかれる間もなく逃げおおせることができたのに。

「すごかったわね、芽夢ちゃん」

先に呼吸を落ち着かせたのは、お母さんの方だった。白い息をもうもうと吐き出しながら、一番聞きたくない名前を平気で口にする。そんな無神経さが、たまらなく嫌だった。

「大丈夫。祈里は、絶対にまた弾けるようになる。そしたら、芽夢ちゃんなんて、すぐよ」

そんなこと、少しも信じていないくせに。

喉元まで出かかった言葉を飲み込むのには、途方もない意志の力が必要だった。呼吸を忘れた身体が欲しているのは、薄っぺらな慰めなどではなく酸素だ。

わあっ――――！

会場の外まで聞こえてきた歓声に、また呼吸の仕方を忘れた。どよめきが冬の空気を揺らすたび、祈里の周りにある酸素が残らず燃えてなくなっていくみたいだった。

「……お母さん。そういうの、いいから」

「祈里？」

「もういいって言ってるのっ！」

「ちょ、ちょっと、祈里⁉」

引き留めようとするお母さんの手を強引に振りほどき、祈里は脱兎のごとく駆け出した。お母さんの履いているヒールがアスファルトをカツカツ叩く音は、背後でどんどん遠ざかっていった。

早く息の吸える場所に行きたい。

今の祈里は、陸地に打ち上げられて窒息寸前の魚のようだった。

こんなところ、来たくなんてなかった。

佐宮芽夢が無双するコンクールなんて、見たくもなかったのに。

「刺激になるかもしれないから」と、ほとんど無理やり連れ出されて、得たものはピアノを弾けない自分自身と向き合う痛みだけだった。こんなことなら、家のソファーで寝っ転がって、一日中ゲームしている方がよっぽどマシだ。

コンクールでいつも祈里の後塵を拝していたあの子――佐宮芽夢が、二度と追いつけないくらい先に行ってしまったなんて、知りたくなかったのに。

呼吸が乱れ、頬が火照り、足の筋肉が悲鳴を上げ始めた。立ち止まって振り返ると、そこにはもうお母さんの姿はなかった。ほんの少しだけほっとして、祈里はまた歩き始めた。

もうここでは一瞬たりとも息を吸っていたくない。

この世で唯一、呼吸をしていたい場所――それは、今の祈里にとってあそこしかなかった。

水原祈里がピアノを弾けなくなってから、もう一年以上が過ぎた。

ピアノが好きで、暇さえあればずっと鍵盤に触れていた。精力的にレッスンをこなし、

先生からも「祈里ちゃんは天才です」と太鼓判を押され、コンクールに出場すれば当たり前みたいに最高の成績を収めた。

中学を卒業したら、音楽専門学科のある高校に進みたいと思っていたし、ゆくゆくは海外留学して、世界的なコンクールも目指してみたかった。

――わたしにはピアノの才能がある。

――だからわたしは、ずっとピアノを弾いて生きていくのだ。

そう信じて、疑わなかった。

変調の兆しは、ごくごくささやかなものだった。

初めに痛み始めたのは、親指のつけ根辺りだった。念のために連れて行かれた整形外科では軽い腱鞘炎と診断された。

練習のしすぎでしょう。二週間も休めばよくなりますから、その間はゆっくり休んでください。

逆らう理由もなく、祈里は言われた期間をピアノに触れないまま過ごした。二週間後、再びピアノを弾いたが、痛みは以前と何も変わらなかった。

何度か診察を受けても、「安静にしてください」と言われるばかり。大きな病院で、大仰な機械を使った検査も受けたが原因はわからなかったし、容態も一向に好転しな

かった。

「精神的なものかもしれません」

医師の言葉は、逃げ口上にしか聞こえなかった。

弾き方が悪いのかもしれないと色んな弾き方を試したりもした。鍵盤が重すぎるのかもとタッチの軽いピアノを使ってみたり、我慢していればそのうちに痛みがどこかに消えるかもと、何時間もぶっ続けで弾き続けたりもした。

そんなことを繰り返しているうちに、いつしか祈里の指は思う通りに動かなくなっていった。鍵盤上を縦横無尽に舞い踊っていた指は、もつれ、転び、地に落ちた。まるで、翼をもがれた鳥のように。

結局、何をしても、祈里の指は元には戻らなかった。

こんな手だったら、切り落としてしまったって構わないのに。

祈里が最後にピアノに触れたのは、一年ほど前のことだ。恐る恐る弾いた曲は、涙も枯れ果てるくらい無残な音に成り果ててしまっていた。これからどれだけ弾いたとしても、過去の自分には一生追いつけない——そんな残酷な現実を、嫌というほど突き付けられた。身体中の水分を出し尽くすくらい泣いて、それ以来、ピアノには一度も触っていない。

祈里が足踏みしている間も、時間は止まってはくれない。

祈里を置いて、どんどん先へと進んでいってしまう。

今日、佐宮芽夢の演奏を聴いて、あらためてそう思った。

——祈里ちゃんは、いつもすごいね！

佐宮芽夢はいつも祈里の下にいて、欲のない顔で、ふんにゃりと笑っていた。自分が天才だとしたら、どんなに頑張っても秀才どまりが精々の子——そんな風に捉えて、眼中にすら入れていなかった。

だけど違っていた。

水原祈里が消えた後、佐宮芽夢は尋常ではない速度で伸びた。

まるで、祈里の才能をそのまま食らったかのように。

かつての祈里がかすむほどのパフォーマンスを発揮し、祈里ですら届かなかった領域にまで手を伸ばしつつあった。

春には海外留学も控えていると噂されている。国内で佐宮芽夢を見るのも今日が最後になるかもしれない、とも。

ステージ上の佐宮芽夢は、祈里が失くしてしまったものを全て手にしているかのように光り輝いていた。

万雷の拍手の中にいる彼女から、祈里は全力で逃げた。
粉々に砕けそうな自分の心を守るには、その場から逃げ出すしかなかった。
忘れかけた呼吸を落ち着かせ、また走り始めた祈里の頭の中を、同じ言葉が何度も駆け巡っていた。
――ピアノが弾けない人生に、なんの意味があるんだろう。
――ピアノが弾けないわたしに、なんの価値があるんだろう。

祈里は夕暮れに沈む街の人々に押し流されるように歩き、駅と自宅のちょうど中間にある神社の古ぼけた鳥居の前にたどり着いた。分厚い木々は、外の世界に渦巻く悪いものたちから祈里を守ってくれるバリアのように思えた。
鳥居をくぐり、長い石段を踏み締めるように上っていく。上るたびに、血液の中にある余計なものが少しずつ洗い流されていくような気がした。ピアノの才能を失ってしまったことも、どこにも行けないみじめな自分も、ここに来れば忘れられる。
長い石段を上りきると、そこには簡素な神社があった。鳥居の赤は色褪せ、社の屋根の至るところに苔が生えている。長い間、人の手が入っていないことがひと目でわかる。この世界から切り取られたかのような静けさが、その神聖さをより際立たせている。

耳を澄ますと、断続的な衝突音が響いていた。
今日もいてくれたんだ。
胸が高鳴る。弾んだ呼吸は、もうとっくに収まっているのに。深く息を吐いて、拳を握って社の奥へと向かった。
そこは林をぽっかりとくり抜いたような広場になっていて、その奥には苔むした石垣がある。
まさに、ボールを投げてぶつけるにはもってこいの場所だ。
「お」
彼はいつも、その一言だけだ。
やってきた祈里を一瞥すると、彼はすぐに石垣に向き直る。まるで、同じ人間だと思われていないみたいだった。その無関心さが、ささくれだった心にはちょうどよかった。
広場の脇に倒れている木に腰かける。
そこは、祈里の特等席だった。
彼は、大きく振りかぶった。
胸を張り、右足を石垣に対して平行に置き、両腕を天に届くほど高々と上げて。
ざっ――と、土と靴が擦れる音。

右腕がしなり、糸を引くようなボールが投げ込まれた。石垣と衝突したボールは、鈍い音とともに高々と上がり、彼の元に戻ってくる。

それは、野球をほとんど知らない祈里にすら、ひと目で美しいとわかるピッチングフォームだった。

ボールを投げる。

石垣に当たり、戻ってきたボールを、また投げる。

メトロノームを思わせる一定のリズム。

祈里は、彼のピッチングを眺めるのが好きだった。

学校の帰りになんとなく立ち寄ったこの神社で見かけて以来、ここで彼を見守るのが祈里の日課になっていた。

レッスンをやめてしまった今、時間だけは嫌になるくらいあった。ピアノを弾けなくなった祈里は、家ではまるで腫れ物だった。家に帰るくらいなら、一晩中でもいいから彼がボールを投げるところを眺めていたかった。

彼がどこの誰なのかを、祈里は知らない。

冬の空気は根強く居座っているというのに、彼はいつでも白の半袖にベージュのハーフパンツ姿で、見ているこちらが寒くなってしまう。野球をするならグローブが必要な

はずなのに、それもない。石垣に向かって延々とボールを投げ、日が暮れるとどこへともなく消えてしまう。

彼は誰なのか。

どこの学校に通っていて、年齢はいくつなのか。

彼の素性は気になるけど、実のところ、そんなのはどうだってよかった。

彼の投球は純粋で、美しい。

祈里を急かしもしなければ、傷つけもしない。

澄み渡った空気のように、ただそこにあるだけだ。

このまま時間が止まってしまえばいい。

この神社だけが、世界から切り取られてしまえばいいのに——。

そんなことを考えていたら。

「あ」

祈里の短い吐息で、機械のように繰り返されていた彼の投球が止まった。足元に転がってきたボールを拾いもせず、しばらくじっと石垣の方を見た後、祈里にも聞こえるくらいの大きなため息をつき、こちらを振り返った。

「よお！」

空気を切り裂くような声だった。
彼の声をほとんど聞いたことがなかった祈里は、思わずびくっと身体を震わせてしまう。
「よお、よお、よお！」
つかつかとこちらに向かってきた。突然すぎて逃げ出すどころか、立ち上がることすらできない。
彼は祈里の前に立つと、野性の獣を思わせる俊敏さでしゃがみ、俯き加減の祈里を下から覗き込んだ。
「やっぱり。泣いてるだろ、お前」
「……え？」
頬に手をやると、指先がしっとりと濡れた。
「そんなに泣かれたら、いくらおれでも集中できねえよ」
祈里が何かを口にするより早く、彼は祈里の隣にどっかと腰を下ろした。あまりにも予想外な彼の行動に、祈里は思わずお尻を持ち上げ、少しだけ距離を取った。
「おれ、ケイ。お前は？」
自分の名前を聞かれているのだと気づいた時には、彼の眉間に幾筋もの皺が寄って

いた。
「い……祈里。水原、祈里」
「祈里ね」
名前呼びされても、嫌な感じはしなかった。心臓は、破裂しそうなくらいに、祈里の胸の中でばくんばくんと暴れ回っている。
「話してみろよ。誰かに話せば、心が少し軽くなるんだろ？　人間ってやつはさ」
ケイは祈里の顔を覗き込みながら、首を傾けてニカッと笑った。
こんな風に笑うんだ、この人。
数秒前までの涙は、もう乾いてしまっていた。

話し終えた頃には、太陽は木々の向こうに沈んでしまっていた。境内にはまともな明かり一つない。街灯のない夜道を一人で歩くのも嫌なのに、今日は不思議と、世界を蝕むように下りる夜の帳を怖いとは思わなかった。
それは――。
「弾きゃいいじゃん」
「はあ？」

ケイの無神経な一言が、祈里の感情を残らず怒りに変換したせいなのかもしれない。
「だから、言ったでしょ。弾けないの、わたしは」
「でも、ピアノってあれだろ？　鍵盤を押せば音が出る、便利な楽器だ。鍵盤を押すだけだったらおれにだってできるぜ？　弾きたいなら、弾けばいいじゃねえか」
あまりにも乱暴な物言いに、心底腹が立った。
なんなんだこいつは。
彼がボールを投げる姿に、神聖さすら感じていたのに。
こんなに無神経なやつだったなんて！
抱いた憧れを、残らず返してもらいたいくらいだった。
「音が出ることと、ピアノを弾くことは違う。あんたには同じに見えるかもしれないけど、ぜんぜん、違うの」
音を出すだけで満足できるなら、ピアノにここまでのめり込むことはなかっただろう。
自分の魂を全て注ぎ込み、命を削るようにして初めて出せる音があるからこそ、ピアノの道を選びたかったのに。
「あんただってそうでしょ。ある日突然、何か……たとえば、事故に遭ったりしてさ、上手に投げられなくなっちゃったら、嫌でしょ」

あれだけ美しくボールを投げられるのだから――そんな言外の意図を何一つ汲み取らず、「いや？」と、ケイはあっさり首を横に振った。
「そりゃ、腕が千切れたりして、投げられなくなったら嫌だけどさ、へたくそになるくらい構わねえよ。だって、まだ投げられるんだぜ？」
その曇りのない瞳に、反論が残らず雲散霧消してしまう。
「投げられさえすれば、またうまくなるかもしれねえし。うまくなったら嬉しいけど、うまく投げられなけりゃ嫌とは、おれは思わねえな」
「要するにあんたは、ただ投げられるだけで、それだけで満足ってこと？」
どうにか絞り出した言葉は、迷いのない肯定に迎え撃たれた。
「当たり前じゃねえか。それ以上、何を望むんだ？」
「……はあ」
なんだか、馬鹿馬鹿しくなってしまった。
どれだけ綺麗にボールを投げられても、一人でボールを投げているだけのやつに、気持ちをわかってもらえるかもしれないと期待したのが、そもそもの間違いだったのだ。
彼の投球を見るのは好きだったけど、もうここに来ることもないだろう。
妙にさばさばした気持ちで立ち上がろうとした、その時――。

「きゃあっ⁉」
怪しい光が二つ、境内へと続く道に、ゆらゆらと浮かんでいた。
「……っ！」
ケイの喉がひゅっと鳴る。
祈里の呼吸は、二つの光を目にした直後から止まってしまっていた。
その光が、ふらふらと揺れながら広場へと出た瞬間、その光は「にゃああ」と一声鳴いた。
「……なんだ、猫じゃない」
月明かりの下で見ると、随分と太った猫だった。
薄暗がりの中、広場に差し込むわずかな月の光を浴びて、紫色に輝いている。その豊かな体躯を見せつけるかのように、のしのしとふたりの前を横切り、ぴょんっと一足跳びに石垣の上に上った。
弛緩した祈里の耳に、「……あのさ」という遠慮がちな声が届いた。
「あっ」
慌てて飛びのいた。
自分でも気づかないうちにケイの服を掴んでいたらしい。祈里が掴んでいたケイの脇腹の服が、びよんと伸びてしまっている。

「ご、ごめん」
「別にいいけど」
その声には躊躇いも高揚もなくて、少しだけムッとした。一瞬でもどぎまぎした自分が馬鹿みたいだった。
しばらく黙り込み、石垣の上でくつろぐ猫を見ていた。
ふとケイの方を見ると、その目は真っ直ぐにあの猫に向かっている。ケイの口元は、ぎゅっと引き結ばれているようにも見える。
もう一度、ケイの視線の先にいる猫を見た。身体中を舌でぺろぺろと舐めているが、あれは毛づくろいなのだろうか。
「……可愛い」
「可愛い？」
そんなはずない、とでも言いたげな声だった。
祈里は少なからずムッとして言い返す。
「可愛くないはずないじゃん。だって、猫だよ？」
記憶も曖昧なくらい昔から、動物の中では猫が一番好きだった。ずっと猫を飼いたくて、何度もお母さんにねだったが、結局飼うことは叶わなかった。

「わたし、小さい頃、猫になりたかったんだ」
「なんで？」
「だって、可愛いじゃない。のんきだし、自由って感じがする」
ケイは何も言わなかった。
石垣の上にいる猫は毛づくろいを終え、悩みもなさそうな顔で、身体全体を伸ばしながらあくびをしていた。
「自由になんて、なりたいか？」
素朴な問いに、答えられない自分がいた。
だけど、ピアノを弾けなくなって、弾けない現実に囚われ続けている自分は、この世の誰よりも不自由に思えた。
「さっき、腕が千切れたりして投げられなくなったら嫌だって言ったじゃない？」
「まあ、言ったけど」
「たとえばさ、わたしが猫になったら、ピアノなんて弾けなくなるじゃない？　そっちの方が、なんか、諦めがつくかもって、思う」
鍵盤を叩ける指があるから、苦しいのかもしれない。いっそなくなってしまえば、思うようにピアノを弾けない自分に苦しむこともなくなるのかもしれない。

猫になってしまえば、指どころか、人ですらないのだから。
「わたしなんて、猫になっちゃえばいいのに……」
祈里は、純粋な憧憬（しょうけい）をもって、石垣の上の猫を見上げた。
月の光が霧雨のように降り注いでいた。石垣はまるでミュージカル劇場のステージだ。紫色の猫を濡らす光は、まるで祈里がかつて浴びていたスポットライトのようだった。
光の中にいる猫が、にいいっと口角を上げた。
『じゃあ、なる？』
猫の笑みとともに、広場に光が弾（はじ）けた。眩いばかりの光は虹色に輝き、一瞬で広場を、ケイを、そして祈里を包み込んだ。
まるで照明のスイッチを切るように、祈里の意識は唐突に途切れた。

◇　◇　◇

誰かが頬を舐めている。

泥に沈んでいた意識が少しずつ覚醒していく。舐められているはずの頬には、肌に触れる感触がない。着込んだ毛皮の上を誰かの舌が這っていくような、不思議な感覚だけがあった。

脳から神経が生え、身体中に伸びていく。失っていた自己の操縦権が、徐々に取り戻されていくようだった。

顔、胴体、腕、そして、足。

動く部分を少しずつ探っていく。

どうやら、動けるみたいだ。

そんな確信を得て、祈里はゆっくりと瞼を開いた。

『……え？』

猫、だ。

全身真っ黒な黒猫が、祈里の頬を舐めていた。

『ひゃあっ⁉』

ばね仕掛けの玩具みたいに　飛び上がった。

その感覚が驚異的だった。

（わたし、どれだけ跳んでるの⁉）

少し飛び上がっただけなのに、軽く見積もっても自分の身長の倍ではきかないくらいの跳躍だった。

とても自分のものとは思えない。

元々祈里は運動神経がよくはなかった。ピアノを弾けなくなるのが嫌で、球技の類は全て欠席してきたし、体育の前には胃が痛くなってしまうほど、走ったり跳んだりするのも嫌いだった。

何これ？

こんな跳躍力、人間離れしているにもほどがある。

これだけ高くジャンプしたというのに、四本の足でこともなげに着地した。その見事な着地は、まるでオリンピックの体操選手のようだ。

急に運動神経がよくなった？

そんなことより、強烈な違和感があった。

（四つ足？）

見事な着地を決めた自分の四本の足を見下ろす。

そこには、縞模様の毛並みがあった。

『えええええええええええええええええええええええええええええええええっ!?』

前足を裏返してみると、柔らかそうな肉球がある。もう片方も同じだった。地面を転げ回るようにして全身くまなく見るが、どこをどうひっくり返しても見事な茶トラの毛並みだった。

ストレッチすらまともにできなかったのに、自分の身体じゃないみたいに柔らかくしなやかに動く。さっきまで真っ暗だった夜の神社は、霞がかかった雲の向こうにある月のわずかな光だけで、まるで昼間みたいに明るかった。

これじゃあ、まるで猫みたいじゃないか――!

『気に入ってくれたかい?』

にゃうん――。

子猫が甘えるような声とともに、言葉が脳に直接打ち込こまれた。石垣の上には、ずんぐりと太った猫がいた。その身体は自ら光を放っているかのように、紫色に輝いている。

『それが、キミの願いだよ』

『願い?』

『言ったじゃないか。猫になりたい――って。だから、その願いを叶えてあげたのさ』

――わたしなんて、猫になっちゃえばいいのに。

身体中から血の気が引いた。

でも、なぜ?

他愛もない妄想を口にしたからと言って、それが実現するなんて思うはずない。

『こっ、困る!　戻してっ!　元に戻してよぉっ!!』

『それは、無理』

大きな紫色のぶよぶよは、母猫の傍でくつろぐ子猫のように、石垣の上をぶにゃぶにゃと転がっていた。

『ムーン!　てめえ!』

隣の黒猫が毛を逆立てて牙を剥いた。

しゃあああ、と身の毛もよだつような恐ろしい威嚇の声。

『おっと。悪いけど、ちょっとの間、ケイくんは黙っていてくれないかな?』

むぐっ――!

くぐもった声とともに、黒猫はその場に蹲ってしまった。

今、『ケイ』と言わなかったか?

『そう。彼がケイくんだよ。ケイくんは今喋れないから、あとでゆっくりお話ししてくれ』

まるで、心の中は全てお見通しと言わんばかりに、ずんぐりとした猫は微笑んだ。
自分だけならまだしも、ケイまで。
怒りがむくむくと湧き上がってきた。
『ふざけないで！　早く、元に戻してよっ！』
『だから、それは無理なんだって。ケイくんを黙らせるくらいならともかく、本当の魔法はそんなにほいほいとは使えないのさ』
魔法？
荒唐無稽な単語も、この現実を目の当たりにしては、背筋が凍るばかりだ。
『心からの望みをかなえる本当の魔法――〈願いの魔法〉さ！　本物の〈魔女〉にしか使えない、正真正銘の奇跡なんだよ！　よかったねえ、幸せだねえ、運がよかったねえ！　いいことするのは本当に気持ちがいいなあ！　じゃあ、さよなら！』
くるっと一回転して立ち上がった真ん丸の猫は、長い尾を誇示するかのように高く掲げて去っていく。
『ま、待って！　待ってよ！』
『これ以上、何か用かい？』
このまま行かせてしまったら、ずっと、死ぬまで猫のままかもしれない。そんなのは

絶対に嫌だ。恐怖に震える心を奮い立たせ、一歩だけ前に出る。
『……わたし、戻りたいの、人間に。猫になりたいって……確かに言ったかもしれない。でも、本気じゃなかった。猫になんて、なりたくない……お願い……お願いします……』
最後は俯いてしまった。
人間だったなら、大粒の涙を流せていたのかもしれない。でも猫の身体では、ただの痙攣か、しゃっくりをしているようにしか見えないだろう。どれほど情けなくても、もう懇願する以外の選択肢はない。
『本当に？』
『……っ⁉』
さっきまで十メートルは向こうにいた紫色の巨猫は、一瞬で祈里の目の前に移動した。大きな身体を小さく縮め、目を細めて祈里を下から覗き込んでくる。まるで心の奥を覗こうとでもしているかのような視線に、身体全体が震えた。
『……ま、どのみち無理なんだけどね。その〈魔法〉はもうボクには解けない。かけるのは得意だけど、解くのは苦手なんだよね、ボクは』
紫色の〈魔女〉はくるりとお尻を向けると、ふさふさした紫色の尾で、祈里の鼻先を軽く撫でた。

『どうしても解きたければ、キミの〈真実の鏡〉を捜しなよ。本当の願いとともにのぞき込めば、もしかすると戻れるかもしれないよ?』

じゃあね。

そう言い残すと、風に吹かれた煙のように、〈魔女〉は跡形もなく消え失せた。

第二章　猫は泣けない

どれくらいそこに蹲っていたのだろう。
時間の感覚はとうになくなってしまっていた。夜の林は、今の祈里にとっては真昼の校庭くらい明るいのに、木枯らしにざわめく木々の影はやっぱり不気味で仕方ない。
『……帰らなきゃ』
家に帰れば、この悪夢も覚めるんじゃないか。
そんな思いで絞り出した言葉に、背後で息を呑んだ気配があった。
『……やめとけよ』
『なんで？』
ケイの言葉に、食い気味に返した。
理由なんて問うまでもないのに、目の前の現実を否定することでしか、今の自分の心を守れそうになかった。

言いにくそうに目を逸らしながら、ケイは言った。
『……わかってもらえねえだろ、家族。その姿で行っても』
『そんなの、行ってみなきゃわからない！』
獣じみた威嚇が喉から漏れた。
自分が発した声とはとても思えなかった。
祈里の喉は人間の言葉を発してはいないのに、なんの問題もなく意思を伝えることができたし、ケイの言葉も同じだった。なぜそんなことができるのかもわからなくて、意思疎通することすら怖かった。
『……帰る。ばいばい』
『おいって！』
強引に会話を打ち切り、境内へと続く道を歩き始めた。勝手に帰ると宣言したのに、背後には追ってくる足音がある。それだけで、心細さがほんの少しだけ軽くなった。
境内には、木々の隙間から漏れるまばらな明かりしかないのに、まるで昼間みたいな明るさだった。世界の見え方が、根本的に変わってしまっている。自分の目に備わっている、明るさを感じ取るセンサーが、人間だった頃の何万倍にも強化されているみたいだ。
目だけじゃない。

耳を澄ませば、通りの向こうにある一軒家の物音すら聞き取れそうだったし、茂みに潜んだ様々な生物の匂いも嗅ぎ分けられそうなほどに鼻も利いている。どちらかといえば鼻炎気味で、ものの匂いを嗅ぎ慣れていない祈里にとっては、猫の世界に充満する匂いは、少々きつすぎるくらいだった。

クラスの中でもぶっちぎりで運動神経が悪かったのに、今の祈里が本気で走ればクラスで一番足の速かった子よりも速く走れそうだ。身体に満ちるエネルギーは人間だった頃とは段違いだが、猫の目から見る世界はあまりにも未知すぎて、呼吸をすることすら恐ろしかった。

地雷原を歩くような慎重さで、ゆっくりと階段を下りていく。踏み外す気はまるでしないのに、一つ足の置き所を間違えただけで、二度と元の世界には戻れなくなってしまうような気がした。

人間の時の何倍もの時間をかけて階段を下り終えると、とてつもなく巨大な物体が、祈里の目の前を猛スピードで走り抜けていった。

『ひゃあっ⁉』

『大丈夫かっ⁉』

ケイが背後から慌てて駆け寄ってきた。ケイは、腰を抜かして動けない祈里の首根っ

こを咥えると、ざりざりと引きずって石段の手前まで戻す。

神社の前には片側一車線の道路が通っている。たった今、目の前を走っていったのは軽自動車のようだったが、まるでアパートがそのまま突撃してくるみたいに感じた。すぐ脇には押しボタン式の横断歩道があるのに、ケイも祈里もボタンを押すことができない。そもそも、横断歩道の横に設置された信号の色が、今の祈里にはよくわからないのだ。

歩き始めた時のなけなしの勇気が、いとも簡単に吹き飛んでしまう。

『……ぐすっ……』

泣き喚(わめ)きたいのに、祈里の喉から出てきたのは「……にゃうん」という情けない鳴き声だけだった。涙なんて出ないし、鼻水だって啜れない。こんな姿でどうやって家に帰るというのだろう。

しばらくか細い声を漏らしていると、左の前足を黒い足が軽く突いてきた。

『……どっちだ？』

『……何が？』

『お前の家だよ。どこにあるんだ？』

『西新町(にししんまち)の、コンビニの、裏』

『けっ。んだよ、結構遠いじゃねーかよ』

ぶつくさ漏らしながら、ケイは道沿いを歩き始める。
『どこ、行くの？』
『だから、お前んちだよ！　一緒に行ってやるって言ってんの！』
ケイはぷいっと前を向いてしまった。どうしたらいいかわからなくて、立ち竦んでいると。
『ついてこねーなら、置いてくぞ』
ケイがこちらを振り向いたので、祈里は慌ててついていった。
迷いなく歩いていくケイの後ろにいると、心細い気持ちが不思議と和らいだ。脇を物凄いスピードでトラックが駆け抜けても、みっともなく飛び退いたりせずに済んだ。
『怖く、ないの？』
『んなわけねーだろ。でも、おれよりもっと怖がってるやつが近くにいるから、今はわりと平気だ』
『……なんなの、それ』
人間だったら、頬を膨らませていたところだ。しかし、頬を膨らませなくてもその子どもっぽさは伝わってしまったようで、ケイは前を向いたまま『ははは っ』と愉快そうに身体を揺らした。

不安なのはケイも同じはずなのに。怖がってばかりの自分が悔しくて、黙ったまま、目の前で揺れる尻尾ばかりを見ていた。
片側一車線の道路をずっと真っ直ぐ行くと、やがて県道にぶつかった。さっきからずっと思っていたが、どうやら猫の目では信号の色がよく見えないらしい。赤と緑がまるで同じ色に見えるので、進むか止まるかは車を見て判断するしかないが、遠くのものはぼやけてしまって、見ること自体が難しい。
猫の視界は、人間と比べて左右が狭く、ぼやけていた。横断中に車が突っ込んできたら、見てから躱すことはできないかもしれない。
人間だったらなんでもない道も、猫にとっては底の見えない断崖絶壁と同じだ。
『……怖えな』
『……うん』
言葉とは裏腹に、恐怖は少しだけ薄らいでいた。
怖いのは、自分だけじゃない――そう思うだけで、少しだけ安心できた。
ケイは左を、祈里は右を確認することにした。
合図を取り合い、二人の呼吸を合わせる。
『それっ！』

ケイが短く鳴いた瞬間、全速力で走った。
人間だった頃よりも数段速いスピードで走っているのに、爽快さは欠片もない。
どうにか走り切り、荒い呼吸を落ち着かせていると、感心したような声がした。
『お前って、案外走れるんだな』
『……案外って？』
『だってお前、ピアニストだろ？　ピアニストは走る必要なんてないじゃん。ピアノ弾いてればいいんだから』
『走るに決まってるでしょ、ピアニストでも』
どんなに苦手でも、体育の時間は走らなくてはならない。週に五日は学校に通わなければならないし、学校にいる間は勉学に励まなければならない。
人間である限り、やらなければならないことは山ほどある。
『あんただってそうでしょ。ボール投げる以外にもすることといっぱいあるじゃん。勉強とか、家の手伝いとか』
返事がなかった。
不安になって振り返ると、ケイは街灯に集(たか)ってぶんぶん鳴く虫を見ていた。
『どうしたの？』

『……ん、ああ、すまんすまん』
呼びかけると、軽い足取りで追いついてくる。
『何よ、虫がそんなに珍しい？』
『いやな、あの虫、食えねえかなと思ってさ』
『えええ……』
うげえ。
もう一度街灯の方を見たが、虫はやっぱり虫だ。
『あんたねえ、いくら猫になったからって、虫なんか食べられるわけないじゃん』
『でも、腹減らね？』
確かにお腹は空いていた。意識すると、空腹感がさらに膨らんだみたいだった。タイミングを計ったみたいに、祈里のお腹がぐるるるると凶悪な音を立てる。
『ほら』
火が点(つ)いたみたいに、身体中がかあっと熱くなった。人間のままだったら、祈里の頬はりんごみたいに真っ赤になっていただろう。猫でよかった。
ぷいっと顔を背け、先導するように歩き始めると、ケイは何も言わずにひょこひょこ後をついてきた。

昔から慣れ親しんだ道に来ると、少しだけ安心した。
もうすぐ家に着く。
家に帰ればなんとかなる――本当にそう信じていたのかは、自分でもよくわからない。

それから少し歩いて家の近くまで来た二人を迎えたのは、ガラスをひっかくような金切り声だった。
向かいの家の塀に上って玄関の方を見ると、着の身着のまま走り出しそうなお母さんと、お母さんを羽交い締めにして止めるお父さんの姿があった。
「祈里ぃ！　いのりいいいいいいぃ!!」
「母さん落ち着け！　まだ何かあったって決まったわけじゃない！」
聞いたことないくらいに大きな声で、お母さんが身体中を震わせて泣いていた。お父さんはスーツ姿のまま仕事の鞄を玄関先に放り出し、粉々に砕けてしまいそうなほどに泣くお母さんを必死に押さえている。
「あの子はっ！　何も言わずにどっか行っちゃう子じゃないっ！　きっと何かあったんだっ！　捜しに行かなきゃっ！　祈里がっ、祈里があっ!!」
「わかった！　わかったからまずは落ち着け！　とにかく、警察に届けて――」

「そんなの、待ってられるわけない！　警察なんて、どうせ何もしてくれないに決まってる！　私が捜さなきゃっ、私がっ！」
お母さんの剣幕に、近所の人たちも家から出て様子を窺い始めた。お父さんはなんとかなだめようとするが、お母さんの感情は次々と破裂するばかりだった。
「うああっ！」
叫び声とともにお母さんが羽交い締めから逃れた。勢いのまま地面に転がり、獣のように立ち上がる。低い姿勢、背筋は丸く、まるで獲物に襲い掛かる寸前の猛獣を思わせた。
「お、おい、かあさ――」
「あんたはいいわよね！　祈里がいなくなっても落ち着いていられて！　いつも仕事仕事で、ろくに祈里の面倒も見ないで！　いつもいつも私ばっかり！　どうせ私が悪いと思ってるんでしょ！　私が見てなかったから、祈里がいなくなったんだって!!」
「そ、そんな……」
お父さんとお母さんが、祈里のことで言い争っている。
ピアノが弾けなくなってから、嫌になるほど見た光景だ。
人間だった頃の祈里なら、そっとその場から離れるだけだったかもしれない。
堪え切れなくなったのは、祈里が猫になったからだろうか。

祈里自身にも、自分の行動の理由がわからなかった。
『待てっ！』
気づいた時には、飛び出していた。
ケイの制止も聞かずに塀から飛び下り、お母さんの足元へ。
『お母さんっ！　お母さんっ!!』
叫びながら彼女の足に飛びつくと、血走った目がぎょろりと向いた。今まで生きてきて、一度も向けられたことのない目だった。
「触るなっ、汚らわしいっ!!」
足が振り上げられた。蹴られるとわかっていても、金縛りに遭ったみたいに身体が動かない。次の瞬間、祈里の身体は小石みたいに宙を舞った。アスファルトに叩きつけられて、息もできない。
『祈里っ！』
ケイが塀から飛び下りてくる。柔軟な身体が幸いしたのか、身体のどこにも怪我はしていないようだった。動くのに支障はないのに、身体はがちがちに固まってしまっていた。身体よりも、心の方がよほど深刻だった。
「どっかいけぇっ！　二度と来るなあっ!!」

ナイフのような言葉が、ずぶりと突き刺さった。
もう一度すがろうとする気力が、残らず萎えてしまう。
遠かった。
両親はそこにいるのに、祈里とは違う世界にいるみたいだった。
お母さんはしばらく玄関先で暴れた後、お父さんに引きずられるようにして、家の中に戻っていった。家からは何か物を投げるような音が断続的に聞こえてくる。その音は、祈里とケイがその場から離れるまで続いていた。

その後の記憶は、ほとんどない。
夜の街をふらふら歩き、気づいたらまだ暗いうちにあの神社に戻ってきていた。車に轢かれずに戻ってこられたのは、ほとんど奇跡のようなものだったと思う。魂の抜けた足取りで石段を上ってあの広場までたどり着くと、祈里は静かに草むらに蹲った。
もう何も考えたくなかった。
これはきっと、悪い夢だ。
目を覚ましたら自分の家で、ああ変な夢だったなあと、ほっと胸を撫で下ろすのだ。
あの太った猫でさえ魔法が使えるのなら、強く信じるだけで願いが現実になったって

いいはずだ。
だが、短い眠りから何度目覚めようと、祈里の姿は猫のままだった。
『なんか食えよ』
どこから取ってきたかもわからないスズメを咥えてケイが戻ってきた。何も映さない瞳のスズメを見ると、とても食べる気にはなれなかった。
『あんたってさ、たくましいよね』
『食わなきゃ死ぬだけだろ』
ケイは祈里の隣にどっかと座り、持ってきた獲物をむしゃむしゃと食べ始めた。
昔、動画サイトで猫がスズメを食べる動画を見てしまったことがある。可愛い猫が見せる獰猛さに耐えかね、光の速さでブラウザバックした。
野性の猫はキャットフードを食べて暮らしているわけではない。
知識としては知っている。
だが、知識として知っていることと、理解することは次元が違う。
『いっそ、もう死にたいよ……』
祈里はまた前足に頭を埋めた。
眠りの世界に逃げても、あの言葉はどこまでも祈里の意識にこびりつき続けた。

――どっかいけ。
――二度と来るな。
瞼の奥に、家族の距離が離れる前のことが浮かんだ。あの頃のお父さんとお母さんは、今よりもよく笑っていたような気がする。
いつからだろう、お父さんとお母さんが笑わなくなったのは。
ピアノを始めてから、祈里の夢は猫からピアニストになった。お父さんの仕事は忙しくなり、コンクールへの付き添いはいつしかお母さんだけになった。
そもそも、ピアノを始めたのだって、お母さんの勧めだった。お母さんは昔ピアニストになりたくて、でもなれなくて、その夢を祈里に託したのだと、普段は飲まないお酒を飲みながら話してくれたことがある。
祈里がピアノを弾くとお母さんは嬉しそうな顔をする。ピアノを弾けなくなった祈里を見るお母さんは、とても悲しそうだった。お父さんの目は、どこか冷めていた。
祈里の家の中心にはいつもピアノがあった。ピアノにのめり込んでいくお母さんと自分。そこから静かに距離を取ったお父さん。家族の間に生まれた亀裂すらも、ピアノを中心にしていた。
祈里がピアノを弾けなくなって、その亀裂はより深さを増した。

お母さんは、祈里がピアノを弾けなくなった原因の一端が、お父さんの不干渉にあると言い、ことあるごとに声高に詰った。

お父さんはお父さんで、そんな家の状況に嫌気がさしたのか、仕事を理由に家族からさらに距離を取るようになった。

今にして思えば、家族の絆を繋いでいたのは、祈里のピアノだったのかもしれない。

その絆が解れた今、あの光景は必然でしかなかった。

お父さんとお母さんが言い争いを始めると、祈里はいつも、二人に気づかれないように、息を殺してそっとリビングから離れることにしていた。仲が良かったはずの家族が、自分のことが原因で言い争うのを見るのがつらかったからだ。

一人きりの部屋の中、考えても仕方のないことを、祈里は何度も考えた。

これは、自分のせいなんだ――。

自分がピアノを弾くことができていたら、もっとましな家族でいられたはずなのに――。

――どっかいけ。

――二度と来るな。

まるでリピート再生の動画みたいに、お母さんの声は頭の中に延々と響き続けた。

断続的に眠り続けているうちに昼が過ぎ、猫になってから二日目の夜が来た。猫の目を通して見る夜は、夜と呼ぶのも違和感があるくらいに明るい。

ぴくりと前足を動かそうとすると、お腹が絶望的なほど大きく鳴った。お腹が空いているのか、お腹を切り裂かれているのかわからないぐらいだった。むしろお腹が痛いと言った方が正しい。

どうにか身体を起こして辺りを見回すが、近くにケイの姿はない。

どこに行ったのだろう。

ひょっとして、愛想を尽かされたのだろうか。

ケイと初めて話した昨日から、今日までの自分の言動を思い返すと、愛想を尽かされるのも無理はないのかもしれない。

お母さんには二度と来るなと蹴飛ばされた。その上、この世で唯一同じ境遇にあるケイから見放されたら、一体どうなってしまうのだろう。明るい夜の闇が、急速に恐ろしいものに思えてきた。

冷たい風に、木々がざわめいている。その一つ一つが意思を持って、祈里を取り殺そうとしているみたいだった。

『……うっ、ぐすっ……』

どれだけ心が泣いても、猫の瞳から涙は流れない。

ケイ。

心の中で、この世界でたった一人、今の自分をわかってくれる人の名前を呼んだ。彼は今ここにはいない。そんなことは百も承知だった。誰かの名前を呼んでいなければ、寂しさに押しつぶされてしまいそうだった。

その時、祈里の背後でくしゃりとプラのレジ袋が擦れる音がした。

『なんだ、起きてたのかよ』

ぎぎぎと壊れかけたブリキの玩具みたいに首を回すと、レジ袋を咥えたケイがいた。袋の底には何やら四角いものがある。

『とにかく、食うぞ。食わなきゃ始まらねえよ』

こんなに素晴らしい贈り物をもらったのは、生まれて初めてのことだった。

ケイはレジ袋をひっくり返して弁当を袋から出した。弁当箱をぐしゃりと踏みつけ、ひしゃげたプラ容器と蓋の間に前足を突っ込む。セロハンテープを引き千切るように、強引にこじ開けていく。

出てきたのは、温めたばかりと思しきハンバーグ弁当だった。

いただきますもなく、獣のように飛びかかった。

『おい、わかってんだろうな、半分ずつだからな。腹減ってるからって、全部食うんじゃねえぞ！　ハンバーグ！』

頷く間もなくかぶりつくと、暴力的なデミグラスソースの香りに圧倒された。こんなにおいしいものがこの世にあっていいのだろうか。神様は、お許しになるのだろうか。神様なんて信じたこともないのに。

人間だった時なら半分だって苦しかっただろうに、身体の大きさは到底半分もないのに、あっという間にぺろりと完食した。

『これ、どうしたの？』

『かっぱらってきた』

『ええ？』

『弁当ぶら下げながら歩きスマホしてるオッサンがいたからさ。タックルして、奪い取ってきた。おれ、訓練すれば立派なひったくりになれるかもな』

『なっちゃだめでしょ』

『へへ』

『あはは』

お腹が満たされて、少しだけ笑いが出た。最後に笑ったのはいつだっただろうとふと考えたが、すぐには思い出せない。少なくとも、思い出せないくらい昔だというのは、間違いなかった。

しばらくぼんやりと星を見ていた。

お腹が満たされたせいか、少しずつ脳みそにも栄養が供給され始めたようだ。

『……これから、どうしようね』

『は？』

『え？』

二人してきょとんとした。

先に立ち直ったのは、ケイの方だった。

『決まってんだろ。ムーンのやつをふん捕まえて、元の姿に戻るんだよ』

こともなげに言い放った。

元の姿に戻る。

そのために、あの〈魔女〉を捕まえる。

行動方針としては至極当たり前なのに、不思議と思い至らなかった。

『なんだ、それともあいつの言う通り、ずっと猫でいたかったのか？』

立ち読みサンプル
はここまで

『それは、違うけど』

『だろ？　なら、迷うことなんてねえじゃん』

そこで、はたと違和感に気づく。

『あんた、あの猫のこと知ってんの？　ムーンって言ってたけど』

『……まあな』

ケイは弁当の残骸を蹴飛ばして、祈里の横に座って上の方を見た。頭上には真ん丸なお月様が、なんの悩みもなさそうに、木々の隙間から顔を覗かせている。

『ここで、一度だけ会ったんだよ。で、少し喋った。そんだけ』

『喋ったって……』

人の言葉を話す猫と出会うって、とんでもないことじゃないだろうか。少なくとも、祈里は一度も会ったことがない。

『あいつは、喋るんだ。〈魔女〉だって、自分で言ってたよ』

〈願いの魔法〉。

確かに、そう言っていた。

――心からの望みを叶える本当の魔法。

――本物の魔女にしか使えない、正真正銘の奇跡なんだよ。